

1 保育の原理を実践につなげる手がかり

子どもは、自ら進んで活動に取り組むとき、その力を最大限に発揮でき、また、伸びる可能性も最も大きくなります。いくら立派な教育目標を掲げても、その原理をしっかりと踏まえて、子どもが生活する実践の場での活動に結びつけていかなければ、目標を達成することはできません。子どもの自発性を出発点にして子どもの発達を促すことを目標にする「子ども中心の保育(child-centered education)」の原理を整理し、さらに、保育実践へとつなげていく手立てについて提案します。

1 子ども中心の保育の原理

(1) 自律性を育む「子ども中心の保育」の原理

幼児期の教育目標は、思考の自律性や社会的自律性を育むことです。「自律」とは自分一人で考え、工夫し、判断して行動できるということです。他人をいっさい考慮に問わず自分勝手に振る舞うということではありません。何かを判断するとき、他人や状況など係わる要因のすべてを考慮に入れながら、しかも「権威」に左右されないということなのです。子どもの自律性を育むために、保育者は子どもにどう関わるべきでしょうか。まず、子どもの自発性（子どもの中から湧きだしたアイディアや意図や計画）を大切にしなければなりません。子どもを放任したら、子どもは育っていきません。子どもが自己実現できているかどうかを見きわめることが保育者の仕事なのです。子どものいつもしている遊びがマンネリ化したり、飽きてなげやりになったりした瞬間を見定めて、保育者は子どもの遊びの流れにそって言葉をかけ、ヒントを出し、手を貸してあげなくてはなりません。よく考えて教育的な営みを組み込んでいくのです。

(2) 子ども一人一人の発達の視点に立つ

保育とは子どもの生活から出発し、子どもの生活を充実させることにつきると思われます。保育者はさまざまな活動の可能性を準備すること、子どもがその可能性の中から最も興味のあるものに取りかかり、活動を展開させることが原則です。子どもの側がその日の活動を決めていくと言ってもよいと思います。細かい計画があってもその日の活動が導入されるのではなく、子どもの側がその日の活動を決めるとしてもよいでしょう。子どもが30人いれば、30通りの活動の内容と時間割になります。保育者はその30通りの進行状況を見守り、必要に応じて遊びの中に加わり、援助や教育的介入を行います。子どもに関わる時には、子どもひとりひとりの発達水準を推測して子どもが一步先に進めるように援助しなくてはなりません。

(3) 「発達の最近接領域」に働きかける

発達の個人差を知り、発達水準をみきわめるには、子どもひとりひとりの「発達の最近接領域」（ヴィゴツキー,1932/1968）を手がかりにするとよいでしょう。発達の最近接領域とは保育者が働きかけによって子どもの発達を先に進めることができる「可能的水準」のことです。既に「完成した発達水準」と、いくら働きかけても効果がない「不可能な水準」の間の領域を指しています。発達の可能的水準にかなった働きかけをしたときに、大人の働きかけを足場にして子どもは先に進むことができます。では、どうすれば、保育者は子どもの発達の最近接領域を知ることができるのでしょうか。

第1に保育者の経験を踏まえること、第2に子どもの模倣を手がかりにすること、第3に子どもの生活歴を踏まえることの3点について以下に述べます。

第1．保育者の経験：保育者は多くの子どもを受け持った経験から、どの子どもにどの程度の具体性をもった言葉かけや働きかけをしたらよいか推測できます。「この子は私が受け持ったあの子によく似ている。取りかかりに時間はかかるけど、集中力があるからきっと最後まで一人で仕上げられるだろう」というような経験から、目の前の子どもの発達の最近接領域を推測するのです。ヒントの与え過ぎは禁物です。最初は少な目にヒントを与え、教え込みにならないように気をつけます。子どもは先に進むことができるまで少しずつ働きかけを変えていきましょう。

第2．模倣：発達の最近接領域を推測するもうひとつのめやすは、「模倣」です。保育者や仲間がやっていることを真似してできることは、もう自力でできる直前まできているということの意味しています。これらの二つのことを手がかりにして、目の前の子どもの発達の最近接領域を推測するのです。

第3．生活歴を踏まえる：一人一人のこれまでの姿を押さえることによって、その子どもの明日の発達可能性についての予測を持ち、働きかけを考えることが大切です。他の子どもと比較するのではなく、その子どものそれまでの発達の筋道を知り、子どもの得意不得意を知った上で、足場を用意してあげれば、子どもは着実に一步先に進めるのです。

(4) 子どもの自律性の発達を促す

保育者が保育室で果たすべき役割をまとめると次のようになります。

第1に子どもの発達水準を評価し援助の与え方を決めると同時に、子どもが何を望み、どんなことを考えているかを瞬間、瞬間に把握すること、第2に子どもの発達に適切な物理的・人的環境を作り出すこと、第3に子ども自身の活動が深まり、そのアイディアや思考力が発展するように援助すること、の3点です。これを実現するためには、(1)保育環境をどう整えるか[子どもたちの今日の活動から明日の育ちを考慮に入れて豊かな素材を用意する]、(2)保育室の人間関係をどのようにつくりだすか[互恵的で協働的な関わりができる人間関係を育てる]、(3)どのように言葉かけをしたらよいのか[教え込

みではなく、ポイントを押さえた少な目のヒントを与える方針で、子どもの育ちにみあった言葉を選ぶこと]に常に心をくだかなくてはなりません。

2 保育原理を実践につなげる方法

保育の目標は「子どもの思考の自律性や社会的自律性を育むこと」です。そのためには子どもの「発達の最近接領域に働きかける」と述べましたが、では、実際には保育者はどう子どもに働きかけたらよいでしょう。

【働きかけのポイント】

1：子どもに考える余地を残す

常に「子どもに考える余地を残す」ように言葉をかけなくてはなりません。

大人の側が全て答を用意して余すところなく明示して、子どもに押しつけるのは禁物です。

具体例：「考える余地を残す」

2学期の4歳児で男児が黒板に書かれた平仮名を見て右から拾い読みし、意味がわからず保育者に質問している場面です。

子ども「“くちか”ってなんだ？」

保育者「これをこっち（左を指さす）から読んで“か・ち・く”って読むのよ」

（と読む方向をさし示す）

子ども「“かちく”ってなんだ？」

保育者「お家で飼ってる動物なのよ」

子ども（ちょっと考えてから、“あっそうか”という納得した表情になり、うなずいた）

ポイント:聞かれたときには聞かれてことだけについて答えてあげてください。その答に満足しなければ子どもは次々質問してきます。子どもが考えるのを待たずに、先回りして余分な説明をつけ加えたり、すぐに答を与えてしまったりしない方がよいのです。

2：思考を相対化させる

禁止や命令の言葉かけ、「～なさい」「～してはいけません」と断定的にきめつけるのではなく、提案の形、つまり、「～したら？」「こうしたらどうかしら？」「私は～って思うけど、～ちゃんは思う？」という言い方をしていただきたいのです。これによって子どもは自分自身で考えますから、子どもの頭の中の活動（脳の活動）が起こることになります。また、友だちの考えを保育者がその子に代わって言語化してあげることで、自分が考えているものとは別の考え、いろいろな考え方があることを知らせることが必要です。

3：保育者の提案を引っ込める

保育者が提案しても、自分の考えが決まらないこともあります。そのときには潔く保育者の提案を引っ込めます。保育者にとってなかなか難しいことですが、「ヒントを出し過ぎない」「言い過ぎない」「保育者の考えを子どもに押しつけない」ということ、つまり自分を抑え、抑制することも必要なのです。

具体例：提案を引っ込める

4歳児クラスの2学期（11月）のこと、保育者が、「ユニコーン」（羽のついたファンタジーに登場する一角馬）のペープサートを制作する場面で、4歳児に働きかけ、ヒントを潔く引っ込めた例を示しています。

子ども「馬をつくって。」
保育者（馬を描きはじめる）
子ども「角のある馬描いて。」
保育者「えー？（しばらく沈黙）これじゃないの？角。」
子ども「ユニコーンて普通の馬みたいなんだけど、たてがみがなくて角があるの。
それで不思議な力を持つてるの。」
保育者「知らない。教えて。」（緊急にかかわる必要のある他の子どもを手助けした後で）
保育者「あなたの馬どうなるかよくわからないんだけど、あなたここに描いてみて。」
（さっき馬の描きかけの紙を渡す）
保育者「どっかのご本にあるといいんだけど。」（独り言のように）
子ども「でてないよ、くうそうのどうぶつだもの。」
保育者「じゃあ、さっきの馬に角、描いてみてよ。そしたらどんなかわかるでしょ？」
子ども「耳がなくて、つるっとしてるの。」（自分では描かずに口で説明する）
保育者「あらおもいろいろのね。こうかな？こういうの？」（子どもの説明を認めて、
子どもが描けないので保育者が試し描きする）
子ども（黙って保育者の手元を見ている）
保育者「こういうの？角」（と2本の角を描き込む）
子ども「2本もないのよ。」
保育者「1本？」
子ども「うん。」（とうなずく）
保育者「1本。こんなかな？」（1本角で足をパッと開いた馬をもう一頭描く）
子ども「走ってんじゃない。止まっているのって言ったでしょ？」
（子どもは「走っている馬」と言っていないというのに）
保育者「これじゃあ ダメ？」（最初に描いた足を閉じた馬に1本角を描き加える）
子ども「羽があるの。」
保育者「ああ、ペガサス？」
子ども（沈黙。“ペガサス”を知らないらしい。しばらく考えてから）
「目をつむると、しわがあるの。」
保育者「よく見てるのね」（もう一頭足を閉じた馬を羽のスペースを残して描く）
子ども（自分の道具箱のところに行き、クレヨンと割り箸を取りだして保育者の
ところに戻り）「ユニコーンは？」（と催促する）
保育者「描いたわよ。それどうでしょう。」
（描き直した馬だがまだ羽が描き込まれていない）

子ども「うん？」（じっと見て）「あと、羽。」

保育者「羽、あとでつける？」 保育者の頭の中には羽は別の紙で2枚づくり

胴体左右につけてはどうかと思っている。

子ども（しばらく考え込む、が、きっぱりとした調子で）「いい。」（と拒否する）

保育者（ササッと羽を描き加える） すぐに保育者の考えを引っ込めた。

子ども（満足そうに保育者の手元を眺め、受け取って色塗りをし、

カットして胴体に割り箸をセロテープで貼り付ける）

ポイント：保育者は、馬の胴体の左右に2枚の羽を貼り付けたら立体的で動かすと羽がひらひらする作品に仕上げる提案として「羽あとでつける？」という質問を投げかけたのです。でも子どもは保育者の言葉から、保育者の頭の中にあるようなイメージを描くことができなかつたのです。そこでこの保育者は保育者自身の考えにこだわらずに、あっさりヒントを引っ込めて、子どもの要求に応じています。

その後の展開：このやり取りは11月に起こったものですが、翌年の2月になると、「羽あとでつける？」というヒントだけで、子どもは保育者の想像しているイメージを子ども自身で描くことができるようになり、立体的な造形が制作されるようになりました。

子どもの発達の最近接領域は目に見えるわけではありませんから、保育者はヒントを短くして子ども自身の反応を見ながらヒントのかけ方を調節していくのです。そしてもし子どもが保育者のヒントを受け入れられないときには、発達水準の見積もりが高すぎたと判断して、それ以上働きかけるのをやめ、ヒントを潔くひっこめ、子どもの育ちを「待つ」「見きわめる」「急がない」「急がせない」態度で関わる必要があります。

